

兵庫県の帰化水草

角野康郎
(神戸大学教養部)

日本には約14種の帰化水草がある(狭義の水草に限定。「約」としたのは、本当に帰化種であるか疑問の残るものがあるからである)。その中には各地で異常繁茂して問題を引きおこしている種もあれば、まだ分布が局限されている種もある。本稿では兵庫県にみられるこれら帰化水草の実情を報告する。

1. オオカナダモ

オオカナダモは、琵琶湖で大繁茂が騒がれる1970年以前に各地で広がっていたようで、兵庫県における分布も淡路島と山間部をのぞき全県にわたる(図1A)。生育場所は主に河川と水路で、数多いため池における出現率はきわめて低い。県下で特に多産するのは武庫川水系、加古川水系の河川で、流れのゆるい所を中心に群生する光景が各所で見られる。

2. コカナダモ

コカナダモの分布拡大の歴史はオオカナダモに比べて新しい。琵琶湖での最初の記録が1961年であるが、数年後には兵庫県でも分布を広げつつあったらしく、1967年に氷上郡柏原町と多紀郡今田町で採集された「クロモ」の標本(京都大学所蔵)が、いずれもコカナダモと確認できた。その後も急速に分布を広げ、現在では県下のど

の地域へ行ってもコカナダモに出会う(図1B)。生育場所は河川と水路が中心であるが、最近、ため池でも目につくようになった。釣人が持ち込むのであろうか。

3. オオフサモ

オオフサモの最初の発見地が兵庫県であることは以前にもふれたが(本会報 No.28:12,1987)、その場所のひとつである明石公園(明石市)には、今も元気に育つオオフサモの姿を見ることができる。しかし、県下の他の地域への広がりはまだ目立たず、産地は限られる。繁茂して困っているという話も聞いたことがない。

4. フサジュンサイ

本種も兵庫県下ではあまり広がっていない。熱帯魚店で売られている「カボンバ」が捨てられ所々に生育しているという状態なのであろう。

5. ホテイアオイ

隣の岡山県はホテイアオイの異常繁茂とその防除で知られた所であるが、兵庫県下でホテイアオイがふえすぎて困っている所は限られる。これは岡山県のようにホテイアオイの生育に適したクリークのような水系がないことが関係しているのであろう。ため池や河川のよどみでホテイアオイを見かけるが、しばらくして行くとたいて

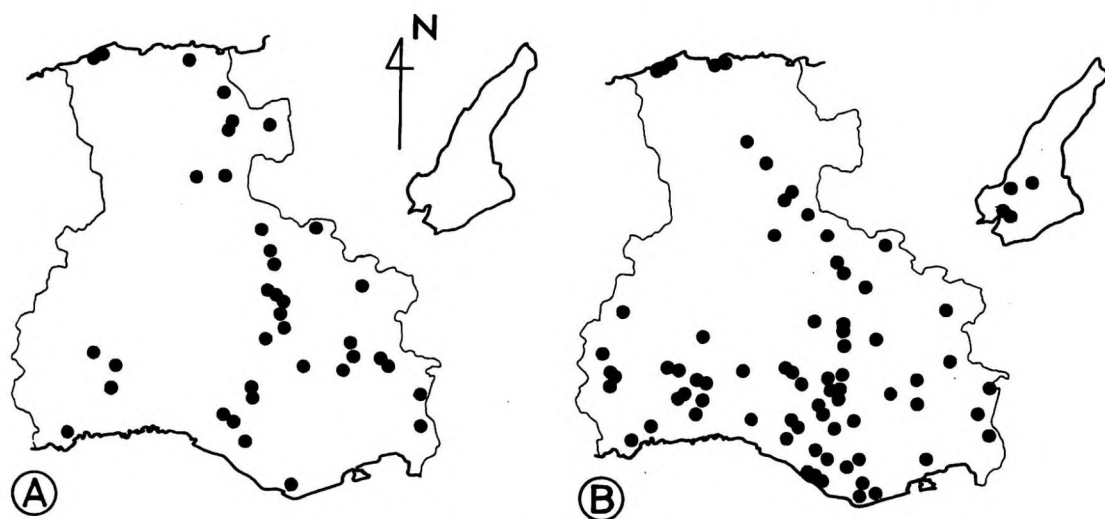


図1. 兵庫県におけるオオカナダモ(A)とコカナダモ(B)の分布。右上は淡路島。

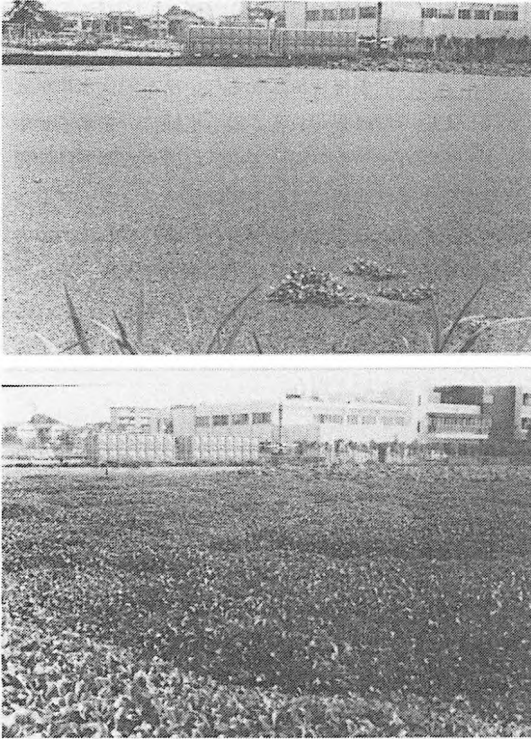


図2. 加古川市三ツ池におけるホテイアオイの繁茂。
(上) 1984年7月26日, (下) 同9月23日。

い消滅している。これは、人に捨てられたホテイアオイが一時的にふえるが十分な栄養条件のない所では結局育たないことを示している。

しかし、富栄養化の著しい水域に入るとその繁茂ぶりはものすごい。その1例を紹介しておこう。加古川市新在家の三ツ池は富栄養化の著しい農業用ため池で、ハスとサンショウモが優占種であったが、1983年頃より、サンショウモの浮遊する開水面にホテイアオイが広がり始めた(それ以前の様子については不明であるが、地元の人からホテイアオイがふえるようになったのは最近のことだと聞いた)。6~7月頃には池の片隅にあったホテイアオイが8~9月にかけて急速に広がる様子はすさまじかった(図2)。このような状態が2、3年続いたが1986年になるとホテイアオイは見られなくなった。おそらく冬の間、長期間にわたって水を抜き池を干したことにより死滅したと推測している。しかし、ホテイアオイのない状態は1年間で終わり、1987年になると再び姿を現わしてかなり広がった。この池では一部の株で結実のみられることを確認しているので、残っていた種子が芽

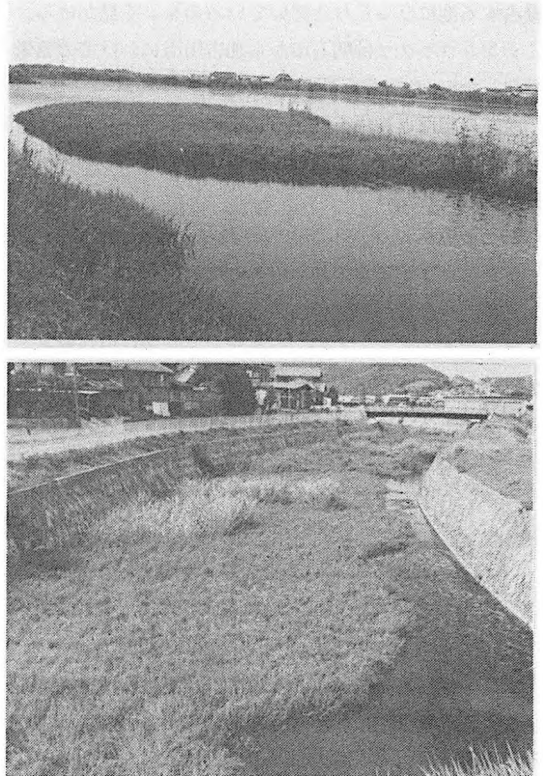


図3. チクゴスズメノヒエの群落(上) 神戸市西区和合池, (下) 加古川市西川。

生えた可能性も考えられる。兵庫県南部には三ツ池のように富栄養化した池が多いのでホテイアオイには要注意だろう。

6. ウキアゼナ

本種は1960年代頃より大阪府、兵庫県、岡山県で記録され、現在は四国、九州などへも広がっている北米原産の水草であるが、私は長い間、兵庫県下でウキアゼナを見ることがなかった。昨年、加古川の水草の調査をしていた際、下流部にあたる加古川市内の流域で本種を見つけた。河川改修工事により一旦水草が壊滅した所で、他の水草に先駆けて侵入していることに興味もたれた。

7. ウキクサ科

日本に産するウキクサ科植物で帰化とされるのはヒメウキクサ、イボウキクサ、ヒナウキクサ (*Lemna valdiviana* の意味で)、ミジンコウキクサの4種である。これら全てが帰化種かどうか再検討が必要と思うが、兵庫県ではこのうちのヒナウキクサとミジンコウキクサが見られる。前者は神戸市西区から明石市にかけ、ハスの

優占する池にびっしりと浮いているのをよく見かける。ミジンコウキクサは明石市から加古川市にかけての富栄養化した2,3の池から記録している。

淡路島南部と神戸市西区の水路にイボウキクサらしきものが産するが、まだ同定に確信がもてないので今後の検討課題としたい。

8. その他

キショウブが各地の池や川べりに逸出している。オランダガラシは神戸市六甲山中の小河川などでときどき見かける程度である。キシウスズメノヒエは帰化種か否か異論のある種だが、本県にはきわめて多い。その一型である「チクゴスズメノヒエ」はため池への侵入も少な

くないが河川での群生が目につく(図3)。

兵庫県下では問題視せねばならないほど帰化水草が異常繁茂している例は限られる。最も広範に分布するオオカナダモとコカナダモの場合でも、河川や水路では他種を駆逐するような状態には至っていない。コカナダモがため池でふえていることが気がかりだが、これについては今後の様子を見守りたい。帰化水草の繁茂は、水辺環境がどのように維持されているかということにおおいに影響される。そのような視点から今後も帰化水草の消長に注目してゆきたいと思う。

水草の種子の寿命

浜島 繁隆

水草の芽ばえを観察する目的で、採集した種子を水道水を入れた管びんに保存し、窓際に置いている。つぎの年に発芽するものもあるが、中にはなかなか発芽せず休眠を続けるものもみられる。今迄に、2年以上にわたり保存して、発芽のみられたものについての記録があるので、それをつぎに報告し、水草の種子の寿命を知る資料としたい。

図の○印は採集、保存を開始した年を示し、V印は発芽したことを示している。○からVまでの間に散発的に発芽したものもあるが、この図には表わしていない。Vの次の?は保存を継続しているもので、今後、発芽する

可能性のあることを示している。

ここに示した7種の水草では、ヒツジグサの種子が最も長い記録で、10年目にも多数の発芽がみられた。つぎにガガブタとカンガレイで7年経過しても発芽能力を持っていた。しかし、ガガブタについては多数の種子の中で1個発芽したに過ぎない。カンガレイでは、保存以来一度も発芽がみられず、7年目に多数の種子が一斉に発芽を始めた。カキツバタの種子は保存を始めた時からすべての種子が浮遊し、現在もそのまま浮遊しながら散発的に発芽をしている。これは、本種が水による種子散布をする証拠である。

